

栗田亮蔵
(地域文化活動部門)

大正七年生まれ

能楽師



栗田亮蔵氏は、四、五才の頃から和泉流の狂言を習い始め、小学校時代には故吉田格太郎師に高安流大鼓を本格的に師事、中学時代からは故藤本理三・本田秀男師に金春流の能を学び、昭和九年、十五才で初舞台「小督」を演じる。以来、八代、熊本はもとより東京、福岡その他各地において能を演じ、精力的に活動している。

昭和二十年から同五十七年まで、松井閑花師のシテと共に、地味ながら地謡の地頭を勤める。

昭和五十七年七月、金春松融会の大黒柱的存在だった松井閑花師逝去の後、会の維持発展のため、中心となり、その総合的技術をもって会員の指導・後継者育成に努めている。特に県民文化祭では、第一回の八代から第二回玉名、第三回天草と金春松融会の薪能をそのメインイベントとして公演。八代市制五十年記念事業では、故本田秀男師の子息光洋師を招いて八代厚生会館で演能会を開催し大成功をおさめたのも栗田亮蔵氏の力に負うところが大きい。

金春松融会発足六十周年記念演能会では、金春流第七十九世宗家金春信高師などを招き、九州では画期的な「道成寺」を演じ、シテを勤めた。

栗田亮蔵氏は、日本の伝統芸術の粹である能の道一筋に大きな足跡を残し、その七十年の芸歴をもって本県能楽会を代表する重鎮である。